

最近の Mark Twain 研究

那 須 頼 雅

Mark Twain 研究は、アメリカにおいて、いささかも衰える気配を見せない。忽然と出現して忽然と姿を消す “mysterious stranger” タイプの主人公を好んで小説の中に登場させた Twain は、自らも忽然と文壇入りをし忽然と消えたが、後に残した波紋は大きく、“mysterious stranger” のとどめたものに優に匹敵する。現代アメリカ文学での *Huckleberry Finn* の連続性を唱えた Hemingway の有名な讃辞を皮切りに、当代第一級の批評家 Lionel Trilling が、“In form and style *Huckleberry Finn* is an almost perfect work” (Introduction to *The Adventures of Huckleberry Finn*, New York: Rinehart & Company, 1948) と断言したこと、それに更に続いて、Gladys C. Bellamy が、*Mark Twain as a Literary Artist* (Univ. of Oklahoma Press, Norman, 1950) の中で、“Mark Twain was much more the conscious craftsman than is generally believed” と訴えたことなどが、Twain 評価の上に次第に影響を及ぼして、Twain を一介の entertainer の位置から不朽の literary artist にまで高めてしまった。既に没後57年近く経過して尚、Twain は、擬装死の術にたけた Huck のように生きた亡霊として、生きつづけていると言えそうだ。1960年代に入ってから最近までに出た Twain を扱った専門研究書だけでも30冊近くのにぼり、Twain 生誕百年祭にあたり異常にその研究を活気づけた1930年代の記録をも倍近く上廻っている状況である。しかも、この大部分が、従来の “funny phellow” としての Twain への興味を棄てて、“conscious artist” としての面を注目しようという本格的な研究業績である。つまり、Twain への関心が、今までの単純な “popular interest” から、冷静な “critical interest” へと大きく動いてきているとすることができるだろう。

これらの研究書を、最近5年間のものに限って大別すると、作家研究、作品研究、伝記研究に関する三つとなる。先ず、第一の部類に属するものとしては、Pascal

Covici の *Mark Twain's Humor* (Southern Methodist Univ. Press, Dallas, Texas, 1962), Henry N. Smith の著わした *Mark Twain: The Development of a Writer* (Harvard Univ. Press, Cambridge, Massachusetts, 1962) があり, Sobert A. Wiggins による *Mark Twain: Jackleg Novelist* (Univ. of Washington Press, Seattle, 1964) 及び, Robert Regan の *Unpromising Heroes: Mark Twain and His Characters* (Univ. of California Press, Berkely and Los Angeles, 1966) がある。

Twain 批評の最大の痛と目されるのは, “the assumption that Twain is a ‘Divine Amateur’ and by no means an accomplished and conscious artist” であると断定して, その後で, Twain が humor を “an end itself” として重用した初期から始めて, “a tool, a technique” として扱うようになった円熟期に至るまでの成長過程を詳細に跡づけた研究が, この最初の Covici のものである。

次の Smith の研究は, critic としてと, historian としてとの両方の立場から, Twain の文学的成育の過程を精査したもので, 作品研究に重点を置いた総合研究とでも言うべきものである。次の書き出しは, 彼の Twain 研究の方向を的確に示すものである。

This book considers first the problems of style and structure Mark Twain faced the outset of his career, and traces his handling of these problems in nine of his principal works. Since questions of technique necessarily involve questions of meaning, I have dealt also with his ethical ideas.

Wiggins は, Twain が自らを “jackleg” と称し, a formal novelist としての自信喪失に陥った事実から先ず説き起して, Twain の創作手法上の転換に言及し, その理由と結果とを, 12の主要な小説に基づいて例証しながら明らかにしている。他の批評家とは異なり, Wiggins は, Twain の手になるからというだけで, いたずらに讃辞を重ねることを避け, むしろ, その失敗の原因を正しく突きとめようと試みている。

19世紀以降のアメリカ現代小説はしばしば “promising childhood” を扱った。Hawthorne が1832年に “The Gentle Boy” を公けにしたのを契機として, Howells, James, Twain, Crane, さらにつづいて Anderson, Hemingway, Faulkner, Fitzgerald, Farrell, Saroyan, Caldwell, Bellow, Salinger など数多くの主要な小説家が好んで

childhood をテーマに選んだ。ある小説家は child を具象化した innocence としてとらえ、大人の歪曲した世界を写しだす mirror として用いたし、あるものは出生から死へのすべての process を通じて childhood に最も重要な意義を認め、child を自己の ideal mask として採用した。中でも Twain は childhood の描出に全生涯をかけたと言っても言い過ぎではあるまい。彼の夥しい数の小説、短篇、sketch, essay の中でそのほとんどがそれを中心課題として取りあげていることが何よりの証拠である。何故 Twain はこれほどまでに child にとり憑かれたのか、しかもそれが family とか society から隔絶され、孤立を常態とするのはどういう理由によるのであろうか。更にまた大抵二人一組の単位で出現し、大人の問題に介入し precocious talents を示すのを一体どう解釈したらいいのだろうか。こういった疑問に対して注目に値する独自の解答を与えたのが Regan の *Unpromising Heroes: Mark Twain and His Characters* である。これより5年前に、Albert E. Stone が、*The Innocent Eye: Childhood in Mark Twains' Imagination* (Yale Univ. Press, New Haven, 1961) を著わし、Twain の初期の粗野な物語から後期の主要作品までの、そこに扱われる childhood のテーマの発展を跡づけた。Regan のは、Twain の諸作品への folklore の影響を辿ると共に、Twain の特異性を併せて明らかにしようという試みである。

先ず Regan は Twain が folklore の語り手たちに取り囲まれて成長し、folklore を数時間聞くことを日課として幼少時代を過したことが Twain の人と作品の上に大きく影響したと説明している。その上、彼は西部での若き新聞記者として folktales を集めることに専心し、その一つの結実が“Jumping Frog”であるし、更に1888年を中心に American Folklore Society 特別会員として活躍したことなどをあげて Regan は Twain への folklore の影響をむしろ必然的なものであったと主張する。その影響として、家庭、世間から爪弾きされ frustration に悩む“unlovely youngster”が周囲の予想に反して驚異的な立身出世をする folklore の主人公“unpromising heroes”と、その類形、世俗的な成功に目をくれない Anti-hero 型とが Twain の人と作品の両面に現れることを指摘し例証する。その一例として Regan は Twain の hero-worship の特異な態度をあげている。Twain は自己に満ち足りず他を憧れる hero-worshiper の面と、世の英雄を卑俗化して自己の位置にまで引

下げようとする Anti-hero としての面とを併せもったという。excellence と unpromising qualifications の二面性が、彼が英雄だと判定する場合の基準であったために、Washington, Franklin, Jackson, Webster, Clay, Lee, Lincoln といった人物に対しては彼は余り眼をくれないで、Grant, Napoleon III, Burlingameなどを高く評価し、英雄の列に加えたという。次に作品の面に言及して Regan は *Tom Sawyer* がそこで giant が征服され宝物が発見され周囲の喝采を博するというパターンを辿ることからみて、“unpromising heroes”の伝統を汲む典型的作品であると述べる。この success story の中にあって success から満足、愉悦、恍惚さえひきだす Tom と、同じ success から不満、狼狽、martyrdom さえ感受する Huck との対照を Regan は指摘して、立身出世型の Tom と Anti-hero 型の Huck とを明確に分け、これら Tom 型、Huck 型が Twain の小説、短篇、sketch などに一貫して登場することを明らかにしている。この Huck 型は Regan の見解に依れば unpromising heroes の変形で Twain が独自に創作したものである。*Tom Sawyer* は Tom が突飛な“showing off”で自分を笑い物にし、読者の拍手喝采を博するという趣向で、物語が進められていたものが、いつの間にか、これと対照的な Huck のスポットライト嫌いの態度が、その物語の焦点に浮かびあがるという変化が見られる。これは、*Tom Sawyer* が書き進められていく過程で、Twain の関心が Tom から Huck へと移行したことに依ると Regan は説明する。

次に、作品研究の輝かしい成果としては、Walter Blair が付けにした *Mark Twain & Huck Finn* (Univ. of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1960) を挙げることができる。これは、*Huckleberry Finn* 誕生の理由、経緯から始めて、その卓越性、更に批評のかずかず、その影響に至るまで、細大洩らさず究め尽した大著である。何にもましてこの書を価値あるものになっているのは、Twain の少年時代の回想記録よりも、むしろ *Huckleberry Finn* という作品自体に、多くの真実があると見做して、この創作に関連のある他の諸作品、夥しい論文を参照し、Hartford, Elmira, Europe での Twain の生活事情を調査し、更に、Twain の広汎な読書遍歴を研究するなど、客観的、科学的資料に基づいて、アプローチを試みている点である。

さて、Twain 研究と言えば、*Huckleberry Finn* 研究と見做されるほどに、*Huck-*

leberry Finn 研究は特に盛んである。ところが、この研究をいま一步完璧なものに近づけるためには、どうしても他の作品の研究成果に俟たなければならないことが、漸くにして着目されてきた。 *Huckleberry Finn* 以外の作品研究が、最近になってぼつぼつ現れてきている。1964年に Henry N. Smith が *Mark Twain's Fable of Progress* (Rutgers Univ. Press, New Brunswick, New Jersey) を出し、難解な小説、 *A Connecticut Yankee* を philosophical fable と看なし分析的な精緻な研究を試みているし、1965年には Bryant M. French が *Mark Twain and The Gilded Age* (Southern Methodist Univ. Press, Dallas, Texas) を書いて、この処理にくい共同著作が Twain の成長発展の上で見逃すことのできない重要な意味をもつことを明らかにしている。更に異色のものとしてわれわれの注目を惹くのは1966年に出た *On the Poetry of Mark Twain* (Univ. of Illinois Press, Urbana & London, 1966) である。著者 Arthur L. Scott は Twain が1874年頃 “I detest ... poetry” と走り書きしたことから Paine の眼にとまり、彼の伝記に書きとめられ、世間の常識になってしまったその謬見を訂正しようと試みている。事実1907年には Twain は “I love poetry” と記したし、終生詩に深い関心を抱きつづけ、現在集録されている Twain の詩だけでも、Scott によれば120篇以上にのぼるといふ。 Twain は Whitman, Browning, Shakespeare の詩を特に愛好し朗読し暗誦し引用しただけにとどまらず、詩人としての一面もそなえていたと云うのである。 Scott は詩の内容にふれて、95篇が comic なもので31篇が serious なものであるが、lines で云えば、comic なものが1600行で、serious なものが1500行であると記している。このことは Mark Twain の「人」と「作品」の両面で興味深い示唆をわれわれに与えてくれる。更にわれわれの注意を惹くのは、Twain の詩と小説との関連である。例えば、次の詩を読むと誰れしも、 *Huckleberry Finn* の中で Jim がわが子を折檻して壘にしたことを後悔する pathetic な条りを思い出すであろう。

It was not wrong? You do not think me wrong?

I did it for the best. Indeed I meant it so.

And it was done in love—not passion; no,

But only love. You do not think me wrong?

'Twould comfort me to think I was not wrong ...

If I had spoken! If I had known—if I had only known!

要するに、この書の意義は、著者が断っている通り “to establish a reputation for Mark Twain in the realm” ではない。それは、詩に対する Twain の強い関心が、彼の主要な小説の構成の上と与えている影響である。この種の研究が相次いで成されるならば、今まで気づかれないうままに残されてきた面が明らかにされることとなり、新しい Twain 像が創り出されることになるかもしれないであろう。

以上、明らかにされた Twain 研究の新しい動向は、必然的に、彼の伝記研究の上にも反映してきた。すなわち、最近出された Twain 伝記はすべて、Twain の literary artist への成長過程に専らライトを当てて、それ以外の側面を削除する傾向を示している。Hamlin Hill は、*Mark Twain and Elisha Bliss* (Univ. of Missouri Press, Columbia, Missouri, 1964) という書物を書き、その中で、Twain を author に仕立てあげた功績者、The American Publishing Company の支配人 Elisha Bliss が、いかにして Twain の運命の書、*Innocents Abroad* を世に出すように仕向けたか、日影者だった journalist をどのようにして抜擢し、文壇に送りこんだかという経緯を明らかにした。また、Margaret Duckett は、*Mark Twain and Bret Harte* (Univ. of Oklahoma Press, Norman, 1964) を著わし、Twain と Harte との影響関係、とりわけ、批評家としても優れた Harte が、Twain の作品の上に、literary artist としての Twain の形成の上に、見逃すことのできない影響を与えたことを示している。しかし、特に、ここで掲げる価値のある伝記は、発刊されて間もない Justin Kaplan の6年間の労作、*Mr. Clemens and Mark Twain* (Simon and Shuster, New York, 1966) である。Albert B. Paine の伝記が、Twain の文学創作上の不毛期、1900年から1910年までの期間に片寄り過ぎて、全体の3分の1余りも、その期間の詳述に当てられているのにひきかえ、Kaplan の伝記は、次のような理由で、31歳以前を切り棄ててしまい、それ以後の literary career を専ら集中的にとりあつかった。

...the central drama of his mature literary life was his discovery of the us-

able past. He began to make this discovery in his early and middle thirties—a classic watershed age for self-redefinition—as he explored the literary and psychological options of a new, created identity called Mark Twain. And this usable past, imaginatively transformed into literature, was to occupy him for the rest of his life.

Paine の伝記には、生きた Twain を直ぐかたわらにして、直かに観察し、口述を写し、物語を聞き、激しい感情に接することのできた極めて幸運な biographer の手になったという絶対的な強味がある。それに対して、Twain 没後50年にして書き始められた Kaplan の伝記は、勿論、写真と活字を通して以外の Twain へのアプローチを拒まれたが、その反面、この一見致命的と思われる欠点を十分に補うものに恵まれた。それは、このどうしようもない距りが逆に幸いして、Twain という^{なま}生の人間に眩惑されず、正当な評価が可能になったという利点である。Kaplan は、Twain の中に、“moral scrutiny”と“the drive to succeed”という相反する二面の葛藤を認め、この二面性を、Twain の意識的創作手法として理解する。このことは、かつて Brooks が Twain の無意識的、宿命的な二面性を認め、それが Twain の才能に益しなかったと主張したことを思い起す時、最近の Twain 研究の特徴を歴然と浮きぼりにするのに役立つ。Paine の伝記の発刊が契機となって、突如として Twain 研究が活況を呈したことが知られているが、Kaplan の伝記は、それに劣らず、大きな刺戟を Twain 研究に与えるであろうことは、先ず間違いあるまい。